

オクトーバーフェストにおける競馬と見世物

青地 伯水

1. オクトーバーフェストの起源は競馬

オクトーバーフェストの起源は競馬であった、といわれても二世紀の現在の祭りに競馬の痕跡すら見いだせない。オクトーバーフェスト来場者の大半も、会場のどこに競馬場があったのか、競馬は競馬場でやればいい、といった反応かと思う。もはや現在の祭りと競馬とのあいだに懸隔が大きすぎ、この祭りの起源はひとつの謎である。しかし事実として、一八一〇年のこの祝祭の初回から、第一次世界大戦にいたるまでは、毎年競馬が行われていた。そこで、現代ミュンヘンの競馬事情と一九世紀の初頭ドイツ社会における競馬の位置について、まず知っておこう。

ミュンヘンには現在二つの競馬場がある。一つは空港へと向かうとに利用するSバーン（近郊高速鉄道）5号線のダーゲルフィング駅のそばにあるダーゲルフィング競馬場である。もうひとつはエルディング行きSバーン6号線のリーム駅から線路沿いにしばらくあると出くわすリーム競馬場である。ふたつのSバーンはそれぞれ別の線であるが、この二つの競馬場は意外なほど近く、歩いていける距離にある。それならば、なぜ二つ競馬場があるのか。

その理由は、開催されている競馬の種類が違うからである。ダーゲルフィング競馬場は、トロットレース、和名繋駕レースがおこなわれるダートコースである。馬は速歩（トロット）で、つまり四本の脚すべてが同時に地上から離れてはいけない走法で走る。人間の陸上競技で言えば、競歩競争にあたる。騎手は馬上にはおらず、二輪の簡素な馬車サルキーに座っており、ジョッキーではなくドライバーと呼ばれる。土煙をあげて追い込んだと思いきや、足あがりで失格ということもまれにある。ちなみにこのトロットレースは一八四八年から五十六年までオクトーバーフェストで試行され、一八六四年に導入され、一八九〇年に初めて正式な祝祭プログラムになった。

一方、リーム競馬場は日本のJRA競馬と基本的に同じ、ギャロップ競馬場である。ただしアメリカ式のダートコースはなく、ヨーロッパ式の芝コースのみである。2012年8月のある日リーム競馬場を訪ねると、G1レースが行われていた。同じ国際機関によって認められているが、日本のG1レースより1着賞金は一桁少なく、わずか6頭立てである。観客もピクニック気分で、ビールを片手に芝生に座っている。ドイツ競馬のギャンブル色は薄い。その証左は、売り上げの

少なさである。一方入場料は高い。リーム競馬場の入場料は10ユーロ（約1300円）であった。そのかわりに入場券で、一枚2ユーロの馬券を5枚買える。そうでもしないと、みんな芝生の上で体を焼きながら、ぼんやり馬の走りを見ている。そんな人々の目の前を馬どもは駆け抜けていく。この競馬とオクトーバーフェストの起源とは無縁でないことをここで断っておく。

近代競馬の起源

民衆競馬

さて、すでに前世紀のことであつたが、バーデン・ヴュルテンブルク州にある連邦裁判所の街カールスルーエで競馬をやっていたので、足を踏み入れた。驚いたことに、野原に木製スタンドがあり、外埒はあつても、内埒はない。これが競馬場だろうか。ギャロップもトロップもこの野原を走る。プロのドライバーやジョッキーが登場するのは数えるほどで、あとはアマチュアレースである。第一レースは農耕用あるいは愛玩用ポニーのレース、ジョッキーには小学生もいる。馬券発売をのぞけば、これは村祭り競馬そのままではないか。ドイツには前世紀の終わりにはまだ、サラブレッドでもアラブ種でもない馬を用いた素人競馬が行われていた。

カールスルーエの村祭りは、人々が自分の馬を持ち寄つて競走をする民衆競馬の代表である。近代競馬の起源を問えば、それは祝祭における民衆競馬と宮廷競馬ということになる。アメリカ競馬の起源が前者であるとすれば、イギリス競馬は後者となろう。かつてのオクトー

バーフェストの競馬はどちらであろうか。その実態を見るべきなのか、その範とした競馬によるのか。

エンジンのない時代は、馬は重要な動力源であつた。貴族は馬を駆り、馬車に乗つた。軍隊の花形は騎兵隊であつた。民衆レベルでも農耕のみならず、動力は馬に頼つていた。それほど身近な生き物であつた馬が、祝祭日に登場しないはずがない。そもそもドイツにおいては、民衆競馬は教会の祝祭と結びついていた。とくに騎士の聖人、家畜の聖人である聖ゲオルクや聖レオンハルトの日には、曲乗りや競馬がなされた。(Möller 61) 当時は街道も野原も舗装されていないので、レースコースには不自由しなかつた。街道から野原に回り込めば、周回コースを作れた。賞品は、村の馬具屋が提供した。人が集まれば、ビールが売れたので、酒保商人がその売り上げからわずかな賞金を出した。村人たちの楽しい行事が、競馬であつた。

競馬の世俗化

ところがこの牧歌的競馬を政府当局が禁止した例が、一八〇〇年代前半に、記録から多数確認できる。(Möller 62) 一八〇八年に始まり、バイエルン中に広く一八三〇年代ごろまで見られる。その理由は、教会權威の衰退とかかわりがあつた。今まで教会の祝日に競馬がおこなわれてきた。しかし、ナポレオンの侵略のち、社会は変質した。余暇よりも勤勉が要請され、教会の祝日を認めない動きが顕著となつた。聖人の祝日は禁止され、それに伴つて競馬も中止の憂き目を見たのだ。決して競馬そのものが禁止となつたわけではない。錯綜した例をあ

げるなら、ミュルドルフ地方裁判所は、一八二二年五月一日、ノイマルクトにおける四月二四日の競馬を伴う祝祭に許可をだした。この日は聖ゲオルクの日であったので、本来祝祭も競馬も禁止されるはずであった。ところが一八〇九年四月二四日、バイエルン王国とオーストリア帝国のあいだに戦闘が勃発したさいに、バイエルン側ノイマルクト兵の勇敢さと住民の努力によって、大火がひろがるのを免れた。それゆえ、つまりこの日は愛国記念日とみなされた。

国粋主義は是認できるが、聖人を祭るのはだめ。教会が主催する競馬は禁止となったが、競馬そのものは残った。主催者は、多くの場合の例にもれず、ビール店を出す酒保商人であった。教会財産のみならず、競馬も世俗化したと言えはおかしいか。いや民衆競馬ももともとは教会財産であったのかもしれない。オクトーバーフェストの競馬起源は一八一〇年であるから、競馬の世俗化よりは少し前の時代である。

宮廷競馬

休日を楽しみとして行う民衆競馬のほかに経済的、軍事的目的のために馬匹改良を目指す競馬がある。馬の能力検定としての競馬である。その先達は、狩猟用ひいては戦争用の馬を育成し、それらを用いて競馬をした貴族たちであった。彼らは、しだいに競馬を遊びや賭けの手段ではなく、経済的投資として自己目的化していく。しかしこれは一九世紀のことである。話が先走りすぎた。

オクトーバーフェストには、その手本となる宮廷競馬があった。そのきっかけもやはり王族の結婚であった。時代はさかのぼり一四三七

年一月二二日公爵アルブレヒト三世は、公爵エーリヒ・フォン・ブラウンシュヴァイクの娘アナと結婚した。アルブレヒト三世は、恋人である、アウグスブルクの床屋医者の子の美しい娘アグネス・ベルナウアーとの結婚を父親に反対された。そればかりか、父は都合の悪い息子の恋人を溺死させた。アルブレヒト三世の結婚は、父との和解を意味していたのだろうか。

さてこの結婚を機に、アナは競馬開催を願ひ出た。この競走が、ミュンヘンで行われた最初の競馬であろう。この競馬の費用は、宮廷とミュンヘン市が折半した。そして最初の賞品が、二六エレ（エレは五〇センチメートルくらいなので、13メートル）の深紅の布地であったので、それにちなんでスカレット（深紅）競走と名付けられた。そして戦時中をのぞいて、この競走は一七五六年まで、ヤーコプ年の市に合わせて、流鏑馬と隔年交代で行われていた。

約二五年間の休止をはさんで、一七八〇年から七年間このヤーコプ年の市競走は、復活した。しかしもはや馬を出走させる貴族はおらず、宮廷競馬ではなくなった。一七九三年選帝侯カール・テオドルはヤーコプ年の市競走の復活を提案したが、市当局はむしろ流鏑馬を好んだ。またもや四半世紀に近い歳月を経て、ようやく競馬は復活する。これがオクトーバーフェストの起源となる競馬である。それは宮廷競馬の伝統を引き継ぎ、それによって権威づけたが、その実態は休日の民衆競馬であった。

オクトーバーフェスト初期の競馬とクレンクル

一八一〇年一〇月一七日に競馬を復活させようと提案したのは、市井の貸馬車屋フ란ツ・バウムガルトナーであった。下士官として近衛隊に仕えていた彼は、バイエルンのルートヴィヒ皇太子とザクセンヒルトブルクハウゼンの王女テレーゼとの結婚を競馬で盛り上げ、ミュンヘン競馬の伝統を復活させることを提案した。

一八〇九年に市民自警団から編成された第三階級国民軍指揮官アンドレアス・ダラルミ少佐は、王から競馬場を作る許可をえた。その競馬場は、新病院の向こうからゼンドリング村まで、外周三キロメートルであった。レースはこれを三周する計画であった。コースは中間地点で馬が走っているのが見えるように作られた。宮廷参加のもとに行われたこの競馬に、軍人を除けば人口四〇〇〇〇人であったミュンヘンで、三〇〇〇〇人の人が集まった。(Hoferichter 7f) この競走の優勝馬は、あにはからんやというよりは、やはりというべきかバウムガルトナーの所有馬であった。

オクトーバーフェスト競馬にその名を残すのは、むしろ第三着となった、馬商人でこれまた貸馬車業を営むフ란ツ・クサーファー・クレンクル(一七八〇—一八六〇)であった。彼はランツフートの時計屋の息子であったが、パン職人として各地を遍歴したのちミュンヘンに帰ってきた。無一文のために反対されながらも、パン屋親方の娘と結婚して義父の店で働いた。しかしその後、馬商人へと転身した。

彼は駿馬に目がなかった。ある学生に馬を貸したら、どこかへ放馬させてしまった。学生がクレンクルのもとに馬をもどしたときには、

馬はすっかりやつれていた。怒り心頭のクレンクルに、その学生は物語を語った。借りた馬で、競走に出て素晴らしい勝利をおさめる作り話であった。クレンクルは氣をよくして、すべてを許した。彼の馬狂いはミュンヘンじゅうで有名であった。ミュンヘンで、下手に馬道楽を語ろうものなら、「お前はクレンクルの猿真似か」とののしられた。クレンクルは齒に衣着せぬ物言い、いたずら好きでもあったので、変わり者扱いされていた。その頂点となるエピソードは、ミュンヘンの大芝地イギリス庭園で起こった。こともあろうに彼は、バイエルン王ルートヴィヒ一世の馬車を抜き去った。もちろんこれは禁止行為である。ところが彼は抜き去りざまに、「陛下、できるやつは、やつてもいいんだ」(Wea ko, des ko)とバイエルン語で叫んだ。この話は、国王をむやみに畏敬するのではなく、むしろ親しみを感じているミュンヘン市民階級の意識を反映していた。それゆえこのバイエルン方言は、そののち慣用語となり、彼自身はおろかオクトーバーフェスト競馬よりも長生きしている。

彼はまたシュヴァイガーが主催するシュヴァイガー民衆劇場の常連客であった。一八五〇年この劇場で「鉄道に乗った道化あるいはミュンヘン・オクトーバーフェスト」という芝居がかかった。登場人物の調教師はクサーファー・エアリヒといい、シュヴァイガー自身が演じた。クレンクルは自分と同名の道化役の舞台衣装に、普段着を貸してやった。クレンクルは、自分の戯画像に自分の服を着せてやるほど、ユーモアを解する人であった。彼は八〇歳の時に、商売で訪れていたシュトゥットガルトの劇場で急死した。ミュンヘンでの埋葬には、数

千人の会葬客があつた。義務にかられた人や泣き女などはいなかつた。クレンクルはオクトーバーフェスト競馬の歴史を体現した人物でもあつた。彼はイングラントからの輸入馬を用いて、オクトーバーフェスト競馬の勝利者リストに何度も名を連ねた。ランツフートの時計親方である父親の名前で、勝利を収めたのも彼の馬であつた。優勝したのは、一八一一年、一二年、一八年、二二年、二四年の五回である。一七年と二〇年には二着になつてゐる。

ところが二六年には、クレンクルはメインレースには出られず、最終レースのみに優勝している。これは農業協会がメインレースへの出走条件として、バイエルン国の内国産馬に限定したからであつた。つまり地元の馬産を奨励強化する目的だという。しかしバイエルン馬による鎖国競馬が、そもそも馬の強化や馬産の奨励に有効であるかは疑問である。

民衆の娯楽化か馬の強化か

現代日本の競走馬も一九八〇年代には、海外からやってきた馬に齒が立たなかつた。したがつて外国産の馬どもは、特定のレースに出走制限された。ところがバブル経済のなかで、日本の生産者は大量にヨーロッパ、アメリカの名馬を買い入れ、馬産を根本的に改良した。これにより日本産馬は、世界水準に追いつき、追い越した感がある。その結果、外国産馬の出走制限を撤廃しても、もはや日本に賞金を狙いに来る馬がいなくなつた。それどころか日本産馬の海外進出が行われる。二〇一八年本家イギリスのエプソムダービーに一番人気で出走した馬

は、日本産馬であつた。結果は四着に敗れたが、この三〇数年間に隔世の感がある。

さて、バイエルンでは外国産馬のみならず、去勢された牡馬も牝馬ももはや馬産に関係がないという理由で、オクトーバーフェスト競走から排除された。この措置が市当局と農業協会のあいだに軋轢を生じさせた。競馬を余興と考える市参事会は、農業協会中央委員会を介してしか、祝祭に関する提案を国王に奏上できなかったからなおさらである。市当局の知らないうちに、一八二七年この経路で、去勢馬の排除が決められていた。

市当局は、競馬をやんごとなき王族の楽しみと一般民衆を呼び寄せる行事と考えていた。これは競馬を馬の生産、育成、馴致の一環と考えていた農業協会とは相いれない立場であつた。両者の対立は平行線のまま、年月を経た。一八四七年ジョッキークラブ、すなわち調教師組合は、バイエルンにおける競馬は、現時点では国民の娯楽であり、それ以外の何物でもないと言言した。(Möhler 67)

しかし現実には、一九世紀の半ばに、馬の所有者・調教師がジョッキーとして馬に乗る時代は終わりをづけられ、市参事会に手厚く保護されていた民衆娯楽競馬が終わりを迎える。(Möhler 71) 一八六五年、最初のミュンヘン競馬協会が設立される。これを機にオクトーバーフェストの競馬において、調教師として趣味で騎乗する市民は姿を消した。

プロの調教師らは馬の調教技術を生かし、高価な馬を育て、賞金の高いレースに出走させる。一八七一年には、オクトーバーフェストの

祝祭競馬もそのようなレースとなる。運営は競馬協会が行い、出走条件にも制限が加えられる。いわば競馬のスポーツ競技化である。例えば一八七六年、プログラムには二つのレースがあげられていた。障害のない平地競走と繋駕競走である。平地競走ではルール通りの鞍をつけている馬、繋駕競走ではオーナーがバイエルン国籍であることが求められている。

オクトーバーフェストにおける競馬の凋落

農場で馬力がモーターにとつてかわられるずいぶん前に、バイエルの民衆娯楽競馬は終わりを迎えた。一九三〇年代まで農場ではたくさん馬が使役されていたが、もはや農耕馬を用いておこなうレースは、競馬とは違うものとなった。一八九七年までフリーデンハイム・ライムやオーバーヴィーゼンフェルトの私的施設で行われていた競馬は、この年からリーム競馬場で行われた。競馬は競馬場で行われるものとなった。いわば競馬の近代化である。この近代化で、いっそうオクトーバーフェスト競馬は、意義を失った。

一九〇六年、オクトーバーフェストのプログラムに本質的な変更がなされた。主催者は、ミュンヘン競馬協会の提案にしたがつて、第二競走をヴィースンの第一日曜日に移した。リーム競馬場でバイエルン賞をおこなう秋開催との関係で、オクトーバーフェスト最終日曜日には競馬が行われなくなった。これで名実ともに競馬は、オクトーバーフェストのメインイベントではなくなった。このうち競馬は衰退し、世界大戦を迎える前年一九一三年を最後にオクトーバーフェストから

姿を消した。

競馬がオクトーバーフェストにおいてあだ花を咲かせるのは、ナチス時代である。一九三四年、国民社会主義参事会員で、悪評高いかつての馬商人クリスティアン・ヴェーバーが、競馬を再興した。テレージエン広場のババリア像の前に新しいレースコースを作り、4日間にそれぞれ繋駕とギャロップを1レースずつ開催した。一九三七年、この馬事文化の強力な庇護者ヴェーバーのおかげで、馬事スポーツの催しは一層拡大された。オクトーバーフェストでは、開幕平地競走のほか、オクトーバーフェストの名物人士を名に冠したクサーファー・クレンクル競走、アウグスト・シヒテル繋駕競走、ヴィンツェラー・フェンドル障害競走が開催された。さらに翌年、お祭り広場の南半分は競馬場となった。

しかし、一九三九年九月一日、ヒトラー率いるナチスドイツ軍のポーランド侵略により、第二次世界大戦がはじまる。オクトーバーフェストは中止となり、競馬のあだ花も散り去った。戦後しばらくしてオクトーバーフェストは復活するが、競馬は再開されなかった。一九六〇年、第二次世界大戦後初めて、そして一度きりテレージエン広場で競馬がおこなわれた。

2. オクトーバーフェストにおける見世物興業

見世物興業の始まりとシヒテル

一九世紀の中ごろまで、オクトーバーフェストにおいて見世物興業は、農業祭をはじめとする他の催しに比して、一等ランクが低いとみ

なされていた。見世物小屋への営業許可リストは、ようやく一八三八年のものが最初である。世紀のころから、見世物小屋は移動可能となり、しだいに増加する。一八六一年から、テレージエン広場では、出店が並ぶ娯楽ゾーンが活況を呈するようになる。この年ミュンヘン市当局は、多くの出店申請を受けてオクトーバーフェストは年の市ではないという認識を示し、販売店よりも見世物小屋を優遇している。

一八六二年バイエルン王国は新営業法を、翌年、新移動営業法を發布し、六八年には営業の自由を認める。これに加えて、七一年ドイツ帝国の成立により小国分立が終わりをつげたこと、鉄道が発達したことによって、オクトーバーフェストの入場者は飛躍的に増加する。当然、見世物小屋も増加する。

この時代のもっとも有名な見世物興業士は、ミヒヤエル・アウグスト・シヒテル（一八五一—一九一一）である。彼は一七世紀にさかのぼる見世物興業士一族の末裔であった。彼らの一族は、年の市、民衆祭、のちには国際ヴァリエテ劇場などを旅してまわった。ミヒヤエル・アウグスト・シヒテルは、一八六九年兄弟とともにミュンヘン・シヒテル劇場を開いた。

そしてシヒテルは満を持して、七二年オクトーバーフェストに最初の劇場を開場した。彼はとくに「生首断裂ショー」で有名になり、魔法・幻想劇場を運営する。これ以降オクトーバーフェストに欠かれない創意豊かな人物とみなされた。彼が登場すると、そこに客が殺到し、周りの店は営業が成り立たなくなった。彼のショーは当時すでに伝説となっていた。

シヒテルはおよそ四〇年間、オクトーバーフェストに出店した。一九一一年に彼が亡くなると、彼の妻が受け継いだ。その年の終わりに劇場を競売にかけた。新たなシヒテルとなったのは、長年の相棒であったヨハン・アイヘルスデルファーであった。彼は一九五三年まで魔法劇場でシヒテルを演じた。オクトーバーフェストの見世物興業はシヒテル抜きには語れなくなった。

オクトーバーフェスト博物館の奇妙なポスター

ミュンヘン市内の中心部マリア広場から、若者向けファッションビル、ルートヴィヒ・ベックの脇を抜けて東へ進むと、右手にシュテルネッカー・シュトラッセ（通り）とは名ばかりの小路とクロスする。小路をのぞき込むと白と青の市松模様、バイエルンの旗を掲げている。ビールとオクトーバーフェスト博物館である。一、二階では、アウグステイナーのビールが飲める。夕方六時以降は、料理も出してくれる。

三、四、五階にオクトーバーフェストの展示がある。祭りを描いた絵画、多大な尽力をした歴代ショッテンハーメル家当主、それぞれの時代に用いられていた食器など、興味深いものがならんでいる。ポスター展示は、それぞれの時代の祭の開催を告知し、当時の雰囲気伝える。そのなかにあつて「三人の最高に太った女性」と題したポスターは、にわかには祭りとの関連が分からない。となりを見れば、下半身のないう女性といったきわ物展示のポスターもあった。現代の人権意識からは逸脱しているが、かつて異形たちの見世物小屋がテレージエン広場

にあった。現在オクトーバーフェスト博物館が展示するには、人権意識からこの二枚のポスターが限界かもしれない。しかし過去には、現代人の想像の埒を越えた見世物があつた。いわばこの祭の黒い歴史である。それではこの今や語られることの少ない歴史をすこしのぞいてみよう。

低い人権意識と欠落した動物愛護精神

シヒテルの魔法劇場が登場して六年がたった一八七八年のオクトーバーフェストが、黒い歴史の始まりである。翌年一月の新聞記事で前年の祭りがもう一度話題になった。やり玉にあげられたのは、メルベルクの「解剖学と人種の博物館」である。彼の催す見世物小屋では、蠟人形により様々な病気や皮膚病を展示した。医学的なものではなく、病を揶揄する悪質なものであつたのであろう。管区監督官ヴォルフアールの記事は、この不道徳な展示を糾弾した。

二年後の一八八〇年には、祝祭広場に四〇〇以上の酒場、見世物小屋、露店が並んでいた。オクトーバーフェストは、大いなる賑わいであつたが、すっかり商業主義に陥つていた。蠟人形館の一つには『レダと白鳥』と題する一連の像が並んだ。ギリシア神話のお話で、ゼウスが白鳥に化けてレダと交わるモティーフである。すぐに当局によって禁止となつた。しかしこれは現代人の目からすると、この程度のおふざけに目くらを立てるのかというレベルである。

一八九二年、見世物小屋には、六本足で三つの見える目をもつ牝牛と三本角の牡牛がいた。牝牛は本来二頭であるべきだったが、何らか

の理由で癒合して生まれた。上半身は二頭だが、下半身は一つである。細胞分裂の過程で分離しなかったのであろう。いうまでもないが、不幸な動物を見世物にすることは、動物愛護の精神に反する。

異形の人間

一九〇四年、この年の来訪者の注目を集めたのは、「驚異の人間」であつた。年代記作者によつてこのような記述が残されている。

パウル教会からこちらに続いている一連の小屋に、ほとんど隣り合つて、一人の巨人と二人の素晴らしくかわいらしい小人がいた。二人の小人は、自称ヴォルゲ侯爵夫妻で、今まで見た小人のなかでもとくに際立つていた。すなわちこの小さな女性は、精神的にも活気があるようで、まさに驚異であつた。五〇歳の侯爵は、ブロンドの八字ひげをたくわえたハンガリー人で、身長七一センチ、体重一九ポンドであつた。彼はつまり通常の二歳児の大きさであつた。彼の妻はロシア生まれで、生まれたときにとても小さく華奢であつたので、しばらくは用心深く扱われた。彼女は十分な教育を受けた。二〇歳の時にたまたま現在の夫と知り合つた。その後、彼女のほうが背が高くなつた。

巨人ピスヤコフは、身長二四一センチメートル体重三七六（ドイツポンドは500グラム、188キロ）ポンドで、テューゲルン湖畔のグムント出身のバイエルンの巨人ハスラーよりも六センチ背が高かつた。ピスヤコフは軍隊で整列のさいには端に立ち、ペ

テルブルクの皇帝宮殿で夜に歩哨をまま動めた。

巨女イローナは、異常な肥満体であった。彼女は四八五ポンドの体重で、腕周りは六七センチ、ふくらはぎ八四センチ、太もも一三〇センチ、ウエスト二四〇センチであった。この肥満体の女性の最も注目すべき点は、その敏捷な動きと静かで力強い脈拍である。三人の巨大児もいた。そのなかには二歳半で一二二ポンド（61キロ）という子がいた。

一九〇七年、全体で八〇を数えた見世物小屋で、七〇頭のホッキョクグマを展示したヴィルヘルム・ハーゲンベック、ブルンバツハ・サーカス、「国民病博物館」が最も来訪客の興味をそそった。翌年、見世物で来訪客を魅了したのは「自然が生んだ瞳目すべき二人の人間」「ライオン人間リオネル」と「筋肉マスター・タボール」であった。おそらく毛むくじらの人間と筋肉隆々たる男であろう。

一九一〇年、オクトーバーフェスト一〇〇周年記念週間のあいだ、客たちは「スペインの拷問監獄」などあらゆる種類の驚異と異常の展示を楽しんだ。第一次世界大戦前の最後一九一三年のオクトーバーフェストは大いに盛り上がったが、見世物小屋では、ハーゲンベックの動物園の「世界最大の蛇」と二メートルの深さに埋められても、素手で這い出して来る「モグラ人間ナゴ」が人気であった。四肢が癒合した双子は、特に女性客の涙を誘った。

戦後のインフレを乗り越え、景気が上向きとなった二四年頃から恐慌が襲う二九年までの短い期間、ドイツでは黄金の二〇年代と呼ばれ

る。恐慌前年の二八年に、おそらくこれまで最大の異形展示がなされた。一八歳の巨人女ハンナは二三八センチメートルで、三人のリリパット王子のうちの一人は五六センチであった。すでに以前に登場したライオン人間リオネル、本物の灰色のひげを生やしたひげ女も観客を驚かせた。

一九三三年、オクトーバーフェストにもナチスの支配が及ぶ。数十年来オクトーバーフェストで展示されてきた「シヤムの双子」と呼ばれた癒合した二人の人間、異形の人、とくに肥満体などは、もはや姿を消す。彼らは均整の取れたアーリア民族というナチスの世界像に適合しなかった。しかし異形の人々が祭りから姿を消したことは、少しも肯定的には評価できない。ナチスは異形の人々、障害のある人々に現実において過酷な仕打ちを加えたのであるから、人権上の問題はさらに深まった。ついでながらナチスは巨人の見世物だけは甘受した。

人間や動物の異形を展示することは、当時の人権意識の低さを表しており、動物愛護の精神もなかった。発展する大衆社会のセンセーショナルリズムに合致していれば、客は集まった。客さえ集まればよいという悪しき商業主義が、オクトーバーフェストを支配していた現れとして、これらの展示は記憶されねばなるまい。

オクトーバーフェストと断食

一九〇四年のオクトーバーフェストは、いわゆる「ヴィーセン・スキヤンダル」とともに歴史に刻まれている。断食芸人リカルド・ザツコは、すでに前の週からテレージエン広場の断食塔のガラスケースの

なかに入って、一五日間にわたって観客を前にして、一切飲食物をとろうとはしなかった。この断食をまやかしたと思う疑い深いものもあれば、芸人を挑発しようと、ケースのすぐ前でこれ見よがしにごちそうを食べるものもあった。

もちろん現在のオクトーバーフェストでは、断食芸などという辛気臭い見世物は行われていない。フランツ・カフカの短編小説「断食芸人」(一九二四)においても、かつては単独で興行が成り立った断食芸が、この数年ですっかり衰退したとの記述がある。名声に慣れていた断食芸人は、ヨーロッパの半ばを駆け巡るが、突如そっぽをむかれてしまう。カフカは一般人から見向きもされない芸術家としての自画像のように、断食芸人を描いている。

カフカの心に潜む奇妙な禁欲性は、断食とどこか波長が合っていたのである。寓話「ある犬の研究」の主人公の犬も断食を試みる。この犬は食物を手に入れる「二つの主要な方法」として「大地を掘りかえしたり水をやりたりする本来の意味での耕作のほかに、それをおぎない、完全にするために呪文をとえたり、歌をうたったり、踊ったりする仕事がある」(カフカ²¹⁷)という。それは一般民衆が労働によって食物を手にする一方、宗教的祭司が食物生産にかかわる魔術的・宗教的儀式を執り行うことによって、生の糧を手にすることを示唆している。

そこでこの犬は、「静かになるとえる呪文と歌声だけで(体力を消耗させるので踊りはしないことにする。)食物がひとりでおりにきて、地面には目もくれず、なかへ入れてほしいとばかりにわたしの歯を

ノックする」(カフカ²²¹)ことを期待する。彼はそのため静かな茂みにかくれて、「最有力な手段である」断食をおこなう。断食は、食物を与えるための通常の努力とは正反対にある魔術的方法である。

ところが断食は犬の肉体にダメージを与える。気を失い血を吐いたこの犬の前にあらわれたのは、「美しく、力強い、するどい目つきをした」猟犬である。自ら糧を求める猟犬は、断食する犬の対蹠的存在である。この猟犬から道をあけるように求められた主人公の犬は、もはや動くことができない。

このとき彼に与えられたのは、「わたしをめぐって、わたしだけをめぐって押し寄せてきたのは」(カフカ²²⁹)、「その崇高さのまえでは森も沈黙している歌声」(カフカ²²⁹)であった。断食を続ける犬に与えられたのは、皮肉なことに食物ではなく、天上からのメッセージともいべき音楽であった。

オクトーバーフェストのリカルド・ザッコは、魔術で食物を手に入れようとしたわけではなかった。彼は、観客が自分の断食芸に肯定的な興味を持ってほしかっただけである。しかし、この興業は裏目にでた。

日常的に一定以上の豊かな食事に囲まれている現代の日本人やドイツ人なら、断食芸の面白みを理解し、興味を示したかもしれない。二〇世紀初頭の人々は、オクトーバーフェストで、非日常の豪華な食物を蕩尽することを楽しみにしていた。祝祭における宴は、日常のつましい食事を忘れることである。当時の大衆にとっては、祝祭は飽食と結びつかねばならなかった。

日曜日は午前中から、ガラス張りの断食塔の前に人々が押し寄せた。オクトーバーフェストを訪ねた多くの人は、ごちそうムードに水を差す断食芸人に憤りを覚えた。ミュンヘン子たちは、一人の男がテレージエン広場で飢えに耐えていることを許せなかった。断食をやめろという叫び声は、暴徒の群れをうみだした。警察隊が投入された。もみあいが起こり、幾人かのものが警察に連行されたが、死者が出る最悪の事態だけは回避された。

月曜日になって、再び騒ぎが起こった。火曜日には、とうとう断食芸人は壁のなかから連れ出された。カフカの主人公の犬とは異なり、断食芸はリカルド・ザッコに形而上のメッセージや天上の音楽を与えはしなかった。

そのぶん、皮肉なことに断食によって食物を引き寄せてしまった。彼はカフエ・ヴィッテルスバッハに連れていかれ、そこで死ぬほどに食べさせられた。ここでも警察が介入しなかったら、彼は弱った体に無理やり詰め込まれた食物のために死んでいただろう。この騒乱の結果、警察は公の秩序を保つべく、催しに関して厳格な指令を發布するという余計なおまけがついた。(Bauer/Fenzl 72)

ドイツ帝国の成立と植民地主義

さて、すこし時代をさかのぼることにしよう。一八七一年にドイツ帝国が成立している。バイエルン王国は、プロイセン王国がドイツを統一するのに手を貸し、ドイツ帝国の一部となった。これを機にベルリン政府は、バイエルンのオクトーバーフェストをドイツ人の国民祭

に再編しようと意図した。

ところが帝国の成立後、ドイツにおけるナショナリズムは下火になっていった。とくにバイエルン人は、バイエルンの独自性を守ろうと、ベルリン政府の思惑をわずかな妥協で巧みにかわそうとした。たとえば一八七六年、射撃大会に用いる人工の岩山に貼り付けた伝統的な鷲の的を「帝国の鷲」に置き換えたのである。(Krauss-Meyl 64)

オクトーバーフェストは、ドイツの祭りではなく、バイエルンの祭り、ミュンヘンの祭りであり続けることに成功したかに見えた。しかしベルリン政府がとる政策、帝国主義と植民地主義の祭りへの浸透を抑えることはできなかった。異国情緒たっぷりの民族展示のなかに、それはあらわれてくる。

探検博物学者アレクサンダー・フンボルト(一七六九—一八五九)の業績や自然科学者たちの著作が、地理的に遠い世界へ人々の関心を掻き立てた。しかし、多くの人々が現地へ旅行するのは、まだ先の時代である。ヨーロッパじゅうの年の市、民衆の祭り、サーカスなどで原住民を連れてきて、展示がなされた。これはすでに一九世紀半ばには、人気のある催しとなった。

この人気の背後に見落としてはならないのが、帝国主義と植民地主義を正当化する論理、キリスト教伝道使命と白人優越感情であった。アルトゥール・ドゥ・ゴビノー(一八一六—一八八二)によって提唱された人種理論や自然淘汰と生存競争という社会ダーウィニズムが、異国の「野蛮人」を観察することでさらに押し進められた。こうして学問的関心から人種主義に至るまで、あらゆる観客を集めるこの展示

は、大いに商売になった。

異国の人々を展示する民族展示の流行に拍車をかけたのが、ドイツ帝国の成立によって広域営業を可能とした帝国移動営業法である。そしてこの法律の恩恵に最も浴した人物が、ハンブルク出身の動物商、私設動物園長カール・ハーゲンベック（一八四四—一九一三）であった。一八七五年以来ハーゲンベックは、ドイツじゅうで東南アジアやアフリカから出演を募り、人々を民族展示に出演させた。

一八七九年、ハーゲンベックは初めてオクトーバーフェストにやってきた。三〇人からなるヌビア人隊商をともなっていた。初めてアフリカ民族を目の当たりにしたミュンヘンの観客は驚愕した。アフリカの生活様式は、ドイツのアフリカ進出によって高まっていた彼らの好奇心を大いに刺激した。

一八八四年、帝国宰相オットー・フォン・ビスマルクは、アフリカ地域をドイツ保護領とし、その後、植民地と宣言した。これにより民族展示は、帝国政府の植民地政策を公に伝え、海の向こうで新たにドイツ皇帝の臣下となったアフリカ人たちへの関心を高める役割を担う。

ハーゲンベックは、民衆の教養に寄与し、ドイツ人の植民地への関心を支えていると自負する。一八八九年、「東アフリカの隊商」では、二七人のソマリア人が、故郷の慣習を披露し、とりわけ戦いの踊りをおどり、大きな関心呼び起こした。

このハーゲンベックが始めた民族展示を引き継いだのが、カール・ガブリエル（一八五七—一九三一）であった。彼は一八九〇年、民族

展示「ベドウィン隊商とエジプト」をおこなった。これは規模において、ハーゲンベックの今までのアトラクションを凌駕していた。一〇〇人以上の男女、子供が展示場におり、またアラビアのサラブレッドとラクダが展示された。一八九八年、モンゴル人とキルギス人の部隊が、模造された彼らの宿営テントで、ダンス、曲乗り、多様な生活習慣を披露した。これはセンセーションを引き起こし、大人気の見世物となった。

一九〇一年、ドイツ政府は、民族展示において植民地の人々を見せることを禁止する。閉じ込めはしないにしても、柵のなかに有色人種を囲って、その柵の外側に料金を払った白人が殺到する絵は、どう見ても人種差別である。

しかしミュンヘンのオクトーバーフェストにおいては、人気に支えられて、この催しは継続される。カール・ガブリエルは、この年「スーダンの村」、〇三年「アシャンティの村」、〇五年、〇六年「アフリカ村」で大きな評判となる。〇五年のうたい文句は、「この上ない真正正銘」のアフリカ村で、雄羊が屠られ、串刺し丸焼きにされた。

ガブリエルは、一九一〇年には「ミュンヘンにおけるサモア」を展示する。太平洋の島国サモアの派遣団が、ドイツ巡業の途上、オクトーバーフェストにあらわれたのだ。このとき摂政ルイポルトはこのショウを訪ねて、タマゼーゼ王と王妃に挨拶をし、贈物を交わした。またサモア人の入れ墨について説明を受けている。異質なものを好奇の目で眺めるといって、民族展示初期のコンセプトから、三〇年のあいだに国際交流へと前進したのは確かである。

一九一三年を最後にオクトーバーフェストは、第一次世界大戦のために中止となる。一九一九年、オクトーバーフェストは、「秋祭り」として復活する。一九二〇年には文字通りのオクトーバーフェストが復活した。

一九二五年、民族展示も催されたが、以前のままで、もはやなかった。ガブリエルとカール・ハーゲンベックの異母弟ヨーン・ハーゲンベック（一八六六―一九四〇）は、ファサードをインド寺院風にした豪華な建物で大民族展示を催した。施設の内部では、踊り子やアクロバット、蛇使いや本物のヨガ修行者が登場した。民族展示も他民族の日常を展示するものから、異国の人々によるショーへと変質している。

一九三〇年には、カール・ガブリエルの民族展示には、四〇〇人以上のアフリカの人々が居合わせた。ミュンヘンの民族博物館は、このうちの女性を集めて、歌をうたわせ、レコード収録をした。民族展示はようやくショーから文化交流へと向かいつつある。翌年、ヨーンが催した「南太平洋のカナカ人」を最後に民族展示は、オクトーバーフェストから姿を消す。

戦後、民族ショーは、一九五八年アフリカショーとして一度限り復活している。翌年には、最後のこの種の娯楽の一つとして、フェルドルの大民族展示「ハワイ村」が客演した。ナツメヤシ、わらふき小屋、オウム、一五〇名の参加者が異国の魔法を広めたのであった。

一九七二年、同一年（当時は夏季冬季を二年ずらしていなかった）オリンピック開催地の縁で、冬の札幌オリンピック開催国日本から、夏のオリンピック開催地ミュンヘンへと三味線と笙を奏でる阿波踊り

がやってきた。民族展示の伝統を知っていれば、日本人が踊りを披露するためにオクトーバーフェストに招待されたことを素直に喜んでいいものだろうか。

第二次世界大戦後、ヴィースンの遊園地化

一九四八年当時のアトラクションの中心は、地元のクロネ動物園であり、その入口で園長カール・ゼンバハは象とともに入場者を迎えた。動物ショーは戦後のオクトーバーフェストにおいても人気であった。しかし動物アトラクションには限界があった。

一九七一年、4500人収容の巨大テントにおける動物ショーがセンセーションを巻き起こした。アメリカからキラヴァール（鯨）が空輸で到着した。6メートル、25トンのこの動物は、ツイストをおどつたり、数メートル水から飛び出したり、少女を背中に乗せたり、九つの技をやつてのけた。ところがこのスペクタクルは、悲劇に終わった。鯨はおそらく環境の変化についていけず、ヴィースンの終了翌日に死んだ。動物愛護協会は、オクトーバーフェストにおける動物ショーの禁止を求めた。

一九七四年のオクトーバーフェストは悪天候にたたられた。「タイのショー」をする異国の客人たちは、観客にダンス、剣劇ショー、ワニ使い、蛇使いなどを観客に見せたが、寺院あるいは宮殿を模した見世物テントのなかで凍えていた。ミュンヘンは九月といえども、日本の初冬のように最高気温が10度に届かぬ日がある年もある。14匹の大蛇をヴィースンに連れてきた蛇使いの女は、環境変化に弱い蛇どもが

死なないように飼育器を昼も夜も保温した。気温にかかわらず、いずれにせよ動物愛護の観点から、動物ショーは衰退していくのである。

一世を風靡したシヒテルの「生首断裂ショー」のような見世物は、すでに一九五〇年代はじめには時代遅れであった。一九二〇年代からすでにアトラクションの中心は、見世物小屋から乗物へと移っていた。それでもシヒテルの見世物小屋は、さらに二〇年露命をつないだ。一九七〇年、夫からシヒテルの店を引き継いでいたフランツィスカ・アイヘルスデルファーが、来年から出店するのは射的場だけと表明した。

新聞は哀惜を込めてこう報じている。「シヒテルの青赤のビロードのカーテンが、店をだすのは今年が最後である。(中略)10月4日にギロチンの齒が落ちると、ミュンヘン最後の滑稽屋台が死を迎える。」技術の発展とともに、もっと力強く高速で動く乗物へと流行は移っていた。フランツィスカは八五年まで店をつづけた。余談ではあるが、シヒテル劇場はマンフレート・シャウアーに引き継がれて、今も伝統のひとつとして営業している。

これら衰退していく見世物にたいして、二〇世紀後半のオクトーバーフェストの興隆を支えたのは、多様な乗物であった。宙返りコースター、ルーピング・バーンが初めて登場したのは、一九五三年のことである。祝祭技術監督協会は綿密な試験を課していたが、乗客に繰り返し人が出た。ルーピング・バーンは非難的となった。

オクトーバーフェストにおける乗物の歴史をここでふりかえってみよう。一八八五年にローベルト・ダッゲゼルによって、移設できる

滑り台がヴィースンに据えられた。その二年後、フーゴー・ハーゼ(一八五七—一九三三)は、それまで文字通り馬力にたよっていた回転木馬に蒸気機関を用いて、大喝采を浴びたのであった。

彼は回転木馬王と呼ばれ、一八九一年には、最初の電動「山岳コースター」をオクトーバーフェストに持ち込んだ。翌年当局から、蒸気機関の使用を禁止されると、彼はすべての乗物を電化した。一九一〇年彼は初めてオクトーバーフェストでジェットコースターを走らせた。彼はしばしば新しい乗り物のプレミアショーの舞台をオクトーバーフェストとした。

さて時代は下って、ゴンドラが猛スピードで回転しながら降りてくるコメットは一九五四年に登場した。一九六〇年にはまだ観覧車の高さは30メートルであったが、七六年には46メートルに、七九年には50メートルになった。その後も新たなアトラクションとしての乗物が次々開発されており、オクトーバーフェスト会場の半分は巨大遊園地と化している。賑やかな音楽が様々な方向から鳴り響き、多彩な電光が目の前を飛び交う。夜のオクトーバーフェストは、幻想的な光のショーとなる。

オクトーバーフェストの伝統維持

先進技術に依拠した乗物がアトラクションの中心となると、オクトーバーフェストは他のビール祭りとは本質的な差異を失っていく。じつさいバイエルンのシュトラウビングで行われるゴイボデー・フェストは、バイエルンでオクトーバーフェストに次ぐ、第二のビー

ル祭りと言われる。オクトーバーフェストは、最大であつても一つのビール祭りにすぎないとの認識が広まっている。極端な言い方をすれば、遊園地と巨大ビールテントの組み合わせだけなら、ベルリンでも東京でも開催可能である。

このようなオクトーバーフェストの巨大ツーリズムによる相対化に抵抗する動きは、すでにずいぶん前から始まっている。つまり、ミュンヘンという土着性、地元感情を大切にし、祭りの伝統を継承しようとする運動である。

例えば一八一六年に始められた宝くじは、今も屋台通りの入り口に定位置としておかれている。一九四七年以来、宝くじの運営はバイエルン赤十字にゆだねられ、その売り上げは、ミュンヘンの貧しい人々の一助となっている。これはオクトーバーフェスト設立精神維持の一例と言えるだろう。

前述のオクトーバーフェスト博物館もこの運動のなかで成立した。この博物館の成立は、二〇〇五年ではあるが、その設立に尽力した人物が、レーベンプロイ・テントの主人であつたクサーファー・ハイルマンゼダー（一九〇三―一九八二）であつた。彼は一九七六年ほかのテントの主人と志を同じくする人々とともに、ミュンヘン・オクトーバーフェスト協会を設立した。そして祭りが外来文化に過度に侵食されてしまわないように努め、オクトーバーフェストの文化遺産を守ろうとした。

オイデ・ヴィースン

ハイルマンゼダーの死後もこの運動は受け継がれていく。つまり祭りを文化財とみなし、過度の商業主義が経済効果至上主義を引き起こし、観光客の単なる社交場にしてしまわない方策が提起された。オクトーバーフェストの起源のひとつである農業祭は、今も四年に一度開かれている。農業祭が開かれないうちに、その敷地でおおいに成功を収めたのがオイデ・ヴィースンである。

オイデ・ヴィースンは二〇一〇年にオクトーバーフェストの祝祭運営団体によつてはじめられた古き良きオクトーバーフェストの再現である。わずかな入場料が必要であるが、オクトーバーフェストの原型を再現し、信用におけるバイエルンの慣習を見せてくれる。古典的な回転木馬には１ユーロで乗れ、木製の輪回しなど初期になされていた子供の遊びを紹介するところもある。

祝祭テントでは、ビールはケーファーローアーと呼ばれる灰色の石のジョッキにつがれる。ビールはミュンヘンの醸造所が、古いレシピにしたがつて共同製作した特別な黒ビールである。バイエルンのブラスバンドによる酒場の音楽が演奏されるが、会話が聞こえないほど場内は騒がしくはない。ダンス場も作られており、椅子の上で踊りだす人もいない。興奮が高まりすぎる祭りの一般地域とは異なり、ここではバイエルンであること、心地よさ、習慣・伝統、文化の記憶に重きが置かれる。

〈参考文献〉

- Bauer, Richard / Fenzl, Fritz: 175 Jahre Oktoberfest 1810-1985, München (Bruckmann) 1985.
- Chaussy, Ulrich: Oktoberfest. Das Attentat. Wie die Verdrängung des Rechtsterrors begann, Berlin 2014.
- Destouches, Ernst von: Säkular-Chronik des Münchner Oktoberfestes (Zentral-Landwirtschafts-Festes) 1810-1910, Festschrift zur Hundertjahrfeier, München 1910.
- Hartl, Andrea: Oktoberfest und Cannstatter Volksfest. Von Nationalfest zum Massenvergnügen, München 2009.
- Hofericher, Ernst / Strobl, Heinz: 150 Jahre Oktoberfest 1810-1960 Bilder und Geschichten München 1960.
- Krauss-Meyl, Sylvia: Das Oktoberfest Zwei Jahrhunderte Spiegel des Zeitgeists, Regensburg 2015.
- Möhler, Gerda: Das Münchner Oktoberfest. Brauchformen des Volksfestes zwischen Aufklärung und Gegenwart, München 1980.
- Praetorius, Rudolf / Hartmann, Herbert: Das Oktoberfest in Geschichten und Bildern. München 1985.
- Veiz, Brigitte: Das Oktoberfest – Masse, Rausch und Ritual: Sozialpsychologische Betrachtungen eines Phänomens, Gießen 2006.
- カフカ、フランツ 決定版カフカ全集 2 1992年 新潮社

(二〇二二年九月三十日受理)
(あおじ はくすい 文学部)